

大神楽再起優勝

紙相撲新聞

第155回本場所
十日目、千秋楽号

編集・発行
日本紙相撲協会

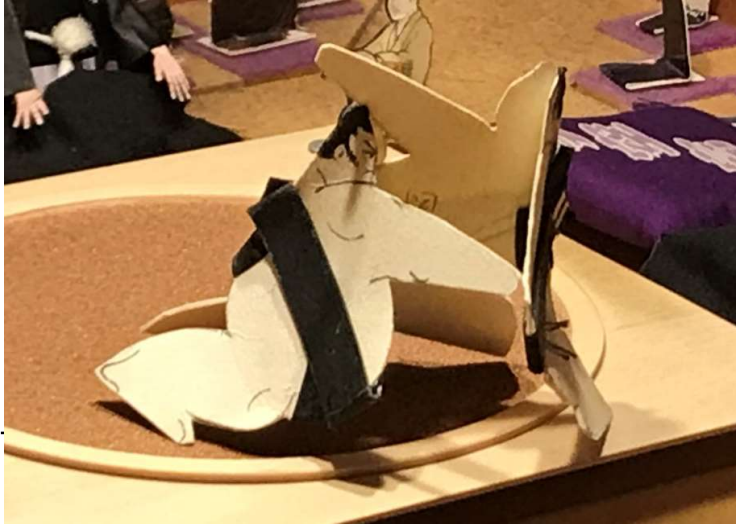
稽古をしないことで体調が万全

場所後に満場一致で大関推挙

【第百五十五回本場所十日目千秋楽】

都内の桜もすっかり散ってしまっ
が、練馬国技館は熱気に包まれる中、
4月17日に十日目と千秋楽が開催
された。開催に先立ち、去る3月に亡
くなられた日本紙相撲協会創設者の徳
川義幸氏を偲び、感謝の気持ちと哀悼
の意を表する1分間の黙祷が朝日松理
事長の発声により参加者全員で捧げら
れた。

今場所は千秋楽まで上位陣による優
勝争いが繰り広げられたが、最後に賜
杯を抱いたのは関脇大神楽だった。千
秋楽結びの一番で、2敗の横綱春ノ翔
と優勝を賭けた直接対決を制して10
勝1敗(2回目)の優勝で、復活を印象
づける見事な優勝となった。また、打
ち出し後、緊急理事会が招集され、満
場一致で大関昇進が決まった。



↑本割で優勝か、決定戦にもつれ込むか、意地のぶつかり合いは名勝負を生んだ。熱戦の末、大神楽が春ノ翔を寄り切り、復活の雄叫びをあげた。



↑改心した磯ノ海親方の無指導、無稽古が功を奏して、大神楽は元気一杯。全盛期の状態に復活した。

三賞は、殊勲賞は2
横綱1大関を倒した小
結烏帽子岳(初)と同
じく2横綱1大関を倒
し千秋楽に勝ち越しを
決めた前頭筆頭の鹿富
士(2回目) 敢闘賞は
関脇大神楽(4回目) 技
能賞は関脇大神楽(3
回目)と鋭いどの輪
で優勝争いを盛り上げ

大神楽の十日目
は3敗の鉄甲と初
顔の一番が組まれ
た。新鋭鉄甲がど
のような相撲をみ
せるか注目がされ
て1敗を守り、倒



大神楽○(寄り切り) ●鉄甲

この時点で3敗組の優
勝はなくなった。また
今場所はのど輪が牙
代小結を押しのけ、大
代小結の出陣に破っ
た。小結の対戦で烏帽
子岳に力なく敗れて優
勝戦線から脱落した。



若巨○(引き落とし) ●白閃光

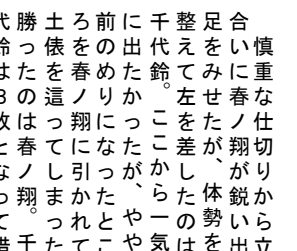
ここまで出世したな
あ！と感慨にむせぶ霧
ヶ浜親方。その期待に
応えるかのよう破って
光を引落しに喜ばせた。
親

迎えた千秋楽。大い
に盛り上がりを見せる
千秋楽はいよいよ三役
北海踏みに。この日は
霧ヶ浜親方が参加。弟
子たちの勇姿に目を細
める中、部屋頭の若巨
が初めて三役揃い踏み
に登場した。「よくぞ



若巨、春ノ翔、千代鈴の三役揃い踏み

九日目を終えて、関脇大神楽が1敗
で優勝争いの単独トップに立ち、これ
を2敗で横綱春ノ翔、大関千代鈴、小
結出羽の3人が追う展開で、十日目を
迎えた。3敗の横綱美空富士、平幕の
鉄甲、喜乃郷、月山、雪若丸、寶蔵、生
駒山の7人も数字の上では優勝の可能
性もあったが、まず2敗までの4人に
絞られたと言ってもいい状況。



春ノ翔○(引き落とし) ●千代鈴

この日の注目は結びの横綱春ノ翔と大関千
代鈴の2敗同士の対戦。勝った方が優勝争い
に残るといえる。先場所は千代鈴が優勝
春ノ翔の3勝1敗だが、場所は千代鈴が勝
っている。春ノ翔は千秋楽に大神楽戦が組ま
れているだけに、まだ自力優勝のチャンスが
あるが、千代鈴は自力優勝のチャンスはない
ものの、あと2番勝って連続優勝に望みを
なげたいところ。

た小結出羽(初)がそれぞれ受賞し

優勝	殊勲賞	敢闘賞	技能賞	十幕	三幕	序二段	序口
大神楽	烏帽子岳	鹿富士	大神楽	出羽	富国	力士	自力
十勝一敗	六勝五敗	十勝一敗	七勝四敗	九勝二敗	五勝	五勝	五勝
(2)	(初)	(4)	(3)	(二)	(初)	(初)	(初)